関根正二　最後の一年

伊藤　匡

はじめに

福島県立美術館は、開館以来関根正二（一八九九～一九一九）の展覧会を四回開催している（註1）。展覧会ごとに、行方不明や知られていなかった作品、画稿類、書簡等が見つかり、展示することができた。その中には、本画との密接な関連を窺わせる画稿、書簡もあり、関根の作画の動機やその展開を推察する手がかりになる。本稿では、関根が最も個性を発揮したと言われる一九一八年以降の作品を中心に、その主題と意味を考察する。

最後の一年間の重要性

関根正二の歿後に編纂された『信仰の悲み　関根正二遺作展覧會』目録（本稿では以下『遺作展覧會目録』と略記。）の略伝には、関根は一四歳の「大正二年二月　初めて絵筆を執り」（註2）、一九一五（大正四）年の第二回二科展に《死を思う日》が初入選、以後毎年二科展に入選するなど、写実を土台にした作品を制作する。だが、一九一九（大正八）年六月に、二〇歳と二か月でその生涯を終えた。

関根の画業は最大に見積もってもわずか七年間に過ぎず、その一年一年が重要であるが、生涯の最後の一年間にその画風が驚くべき変化を遂げた。一九一八年五月一一日の日記に、関根はこう書いている。

「真実に違（偉）大な力を感じた人間が生まれた。天才が生まれる時、多くの人間はそれを恐れる。真（信）じて居た友人までもが恐れる。狂者かなにかと思つて恐れる。ことに日本人はそうだ。なさけなくなる」（註3）。

関根の友人たち、作家久米正雄や日本画家伊東深水も、関根作品が一変したのは一九一八年春に、蓄膿症の手術をしてから後のことと断言している。伊東深水は、

「君の芸術が全く何等妥協を許さない併も真に生命づけられたるのは君が鼻の療治をしてからだと思ふ。否実にそれ以後のことである。君が極端な熱情に支配されたのも矢張りその頃からであった。久米正雄氏が舞台監督となって国民座が有楽座で『圓光』を上演した時、実はその『圓光』の背景になる舞台面の油絵の額を描いた。私は君に伴はれてその舞台を見に行ったが私は戦慄を覚える程その作品に威嚇された。実にその時からの君の芸術は日本人とは思へぬ程美しい色彩と、しかも時代を超越したその作構は全く日本の天才であることを痛切に感じしめるほど強く思はれた」（註4）。

国民座による『圓光』の舞台が開催されたのは、一九一八年五月二九、

三〇日である。関根の日記の日付と照合すれば、関根らしい作品が描かれたのは一九一八年五月頃からのこととなる。関根の絵が強い個性を発揮したのは、この時から亡くなる一九一九年六月までの約一年であった。

〈子守する少女〉から《姉弟》へ

舞台『圓光』の背景画を別にすれば、関根がいわば〈覚醒〉した後に最初に関心を持ったモティーフは、〈子守する女〉であった。それは、友人村岡黒影宛の一九一八年五月二〇日付書簡（福島県立美術館蔵　図1）に登場する（註5）。

山並みを背景に、横向きの少女が全身像で描かれ、その背中に子どもが描かれている。比較的細部まで描きこまれているのは少女の顔の部分のみで、他は数本の線描で輪郭を取っているに過ぎない。背負われている子どもの頭の周りにもう一本線が引かれ、円光のようにも見える。

《子守する女と横顔》（図2）の鉛筆素描には、書簡に描かれた少女の横顔の一部と、子守する女の正面向きのポーズが描かれている。この素描の裏面には、《少年》（図3）が描かれている。この正面を向いた顔は、背負われた子どものスケッチの可能性が高い。

書簡の挿図は、《姉弟》（福島県立美術館蔵　図4、口絵3頁）へと展開する。両図で大きく異なるのは、背景である。書簡では遠くに山並みが描かれているが、油彩画では画面ほぼ中央に水平線が描かれ、緑の野原になっている。手前にはひまわりとも見える花が一面に咲いている。さらに《姉弟》では背負われている子どもの円光が消えている。

《姉弟》について、その最初の段階では、「魔気人に迫るものがあつた。」と久米正雄が回想している。関根が二科展に出品するために手を入れたのだが、友人たちは却って表現が弱まったと見ている（註6）。手を入れたとすれば、手前の花だろうか。現在の作品を見る限り、魔気迫るという印象ではなく、むしろ関根自身が姉に背負われて育った幼い頃への思いや、其の頃育った故郷白河への思いを感じさせる。

この絵のモデルについて、新聞や雑誌の取材に関根自身は「自分の主観を現さうとしてモデル無しに描いたもの」（註7）と言い、父親の政吉は「『姉弟』は近所の子供を描いたので、小さい子は歳の割に、ませた顔をしてゐますが、那の通りです」と証言している。スケッチが遺されていることから、部分的には近所の子どもか誰かをモデルに写生しながら、絵全体は関根の頭の中にある原像を表現した構想画と考えられる。背景が、遠くに山並みが見える景色から、野原に変わったことは何を意味するのか。どこかの実景と断定はできないが、関根の故郷である白河など具体的な場所から、関根の頭の中にある世界が舞台になったことを意味するのだろう。

《病める者》

関根の村岡黒影宛一九一八年七月三日消印の葉書（註8）には、《病める者》と題のついたペン素描が描かれている（福島県立美術館蔵　図5）。草原に一人の人物が立っていている。首から足先までを覆う長衣を身にまとい、両手を腹の前に合わせている。手には果実のような丸い物を持っている。両胸がふくらんでいるようにも見える。顔の周りは包帯が巻かれ、耳を覆っている。背景には円が描かれているが、月のようにも、または聖なる者を表す円光のようにも見える。関根は一九一八年四月頃蓄膿症の手術のために帝大病院に入院し、そこで知り合った田口

真咲という女性を親身になって介護したものの、結局失恋したと伝えられている。この《病める者》には、その女性への思いが投影されているのだろう。

関根の女性単身立像には、《女》（『文章世界』一三巻六号　一九一八年六月号）がある（図6）。そこでは、腹の前に合わせた両手で何かを持っている姿勢を取っているが、頭に包帯は巻いていない。また背景には太陽らしき赤い円と光線が描かれている。この二点は、対のように見える。《女》が昼の世界に住む健康的な存在であるのに対して、《病める者》は夜の世界の病に冒された存在である。制作時期は近接しているが、《女》の方が若干早いと考えられるから、始めに《女》を構想し、対比的な《病める者》のイメージが浮かんだのであろう。

この《病める者》のモティーフは、『文章世界』一三巻一一号（一九一八年一一月号）の挿図に引き継がれている（図7）。比較すると、人物の胸のふくらみや腰の括れが明確に描かれていることから、この人物が女性であることがはっきりする。背景の月または円光は消え、人物の立つ地面には植物が描かれている。

《病める者》から《三星》へ

頭に包帯を巻いた人物のモティーフは、その後《三星》（東京国立近代美術館蔵　図8、口絵3頁）に再現される。包帯を巻いた中央の人物には乳房が描かれていたことが、X線の透視で明らかになっているのだが、中央の人物は関根正二自身とされている。女性から男性それも関根自身へと変更されたことになる。

関根は、蓄膿症の持病があった。その影響からか耳の痛みにも悩まされていた。「耳が激しく痛むので、何んにも出来ない」（一九一七年七月三日の日記）。したがって、治療のため耳を包帯で巻くことも実際にあったかもしれない。しかし、この包帯に自らをゴッホになぞらえ、その天才性と狂気を包帯を巻いた姿で象徴したのではないか、という見方もある（註9）。「『病める者』が頭部に巻く包帯のようなものについては、蓄膿症などの身体的な病気との関連よりも、むしろ精神の病＝〈狂気〉との関連で捉えるべきもの」という指摘である。

〈天才〉と〈狂気〉は、ゴッホに心を寄せた関根の願望でもある。関根にとって〈狂気〉と〈天才〉と〈孤独〉は同一のものの異なる側面である。ゴッホは耳を切った《自画像》（図9）を描き、そこでは耳を覆って顔の周りに白い包帯が巻かれている（註10）。《三星》中央の頭部に包帯を巻いた自画像において、関根は自らをゴッホになぞらえた〈天才〉として描いている。

ただし、この時期の関根にとっては精神の病だけではなく、身体の病も同様に重要と考えられる。この《病める者》のイメージが最初に描かれた前記の葉書に「僕は外に出られないのです」と病床にあることを記している。身体的な病気が契機となり、病気にかかっている＝病める者を美化するイメージが、最初にあったと見られる。

《病める者》は始め女性像として描かれていた。その時点では、《病める者》は思慕または救済の対象であったはずである。それが関根自身の自画像になったことは、制作意図が大幅に変更されたことを意味する。《病める者》から《三星》への制作意図の変更は、人物が三人になっていることに現れている。三人の立像は他に《無題》（『文章世界』一四巻三号表紙　一九一九年三月号）がある（図10）。《三星》との共通点は、

中央の人物が赤いマフラーらしきものを首に巻いていることであるが、頭に包帯は巻いていない。両脇の人物は、略画的な筆致のため男性とも女性とも決められない。この画の下絵と考えられる《文章世界表紙下絵》（図11）では、三人の人物が同一方向を向いて近接して立っている。両図を比較すると、《三星》の両脇の人物が、中央の人物に半身が隠れるほど密着した姿勢であることが際立つ。《包帯の男》がスケッチブック（三重県立美術館蔵）に描かれているが、その段階では単身像である（図12）。包帯を巻き病身の関根の両脇に、二人の女性が寄り添って、三人一体のように描かれていることを重視するべきだろう。この作品で、中央の人物はゴッホになぞらえた包帯を巻いた天才という強い自己主張と、同時に両脇の女性たち、肉親や恋人たちに支えられ救われたいという願望が渾然となった、両義的な存在として描かれている。中央の人物を、美術史家土方定一らが女性と認識していたのに対して、関根の友人たちは関根自身と見ていたということは、中央の人物の両義性を象徴しているように思われる。（モデルの問題は後述する。）

なお、三人の手前には速筆で花が描かれている。この花は、現実世界ではない別の世界であることを象徴していると考えられる。これは《信仰の悲しみ》《姉弟》《慰められつゝ悩む》に描かれた花も同様で、その最初は《天平美人》に遡る（註11）。

病気と死因

関根の心身の状態と制作との間には、強い連関が見出せる。そこで、一九一八年から一九年にかけて、関根の心身の状態を、友人に宛てた手紙や友人の回想、当時の新聞記事等から時系列順に並べてみる。

㈠ 一九一八年四月頃　蓄膿症の手術をする。

関根は長年患っていた蓄膿症の手術をしている。これについては、久米正雄や今東光が小説にしている。正確な日付は不明ながら、友人村岡黒影宛の一九一八年五月二〇日消印の書簡で、「鼻の手術」に触れているから、それ以前である。

㈡ 六月上旬　酔って暴れ、警察署に一晩留置されたことが新聞記事で「発狂した」と伝えられる（時事新報一九一八年六月一一日）（註12）。

「心配をかけてすみませんでした　ほんとに皆様に心配をかけた落着いた気分になって居る」（村岡黒影宛葉書一九一八年六月一二日消印）（註13）。ここでの「心配」は、そのことを指しているのであろう。なお、この葉書は差出人住所が銚子になっており、体力的には問題なく銚子に出かけられる状態だった。

㈢ 六月～七月　肋膜肺炎にかかる。

「此度は身が本当に悪くなり医者の云ふ通り床につき一歩も外へ出ません。ロクマクハイエンとか云ふのです」（村岡黒影宛葉書一九一八年六月二八日消印）（註14）。

「僕は外へ出られないのです」（村岡黒影宛葉書一九一八年七月三日消印）（註15）。

肋膜炎は胸膜炎のことで、結核、肺炎、リウマチ、外傷および癌の転移などで起こる。

㈣ 一一月頃～一九一九年一月頃　肺炎にかかる。

『遺作展覧會目録』の年譜には、

「大正七年十一月　流行性感冒に罹り病臥、以来健康勝れず」とある（註16）。ここでいう流行性感冒とは、スペイン・インフルエンザ（ス

ペイン風邪）であろう。

「病気の為め三十日から床について居る　とても一週間位は出られない　絵も描かねばならないのに実に閉口です」（村岡黒影宛葉書一九一八年一二月三一日消印）（註17）。

「僕は十二月二十七日から肺炎で寝て居ます　一時は心配しました　現在もまだ外出は出来ません」（村岡黒影宛葉書一九一九年一月二五日消印）（註18）。

㈤　一九一九年六月　病床に就く。

「新進画家関根正二氏は、頃日来腸を患いたるが病革まり十六日午後一時半長逝せり」（万朝報一九一九年六月一七日付）（註19）。

関根正二の死因は、正確には伝わっていない。医師である加藤稔は「一一月、流行性感冒にかかる。これがこじれて、さらに翌年一月、肺炎となる。その間にも肺結核は進行し、病臥する日も多くなっていった。」そして「肺結核のため、二〇歳という短い生涯を閉じたのは大正八年六月であった。」（註20）という診断を下している。

スペイン・インフルエンザは一九一八年から一九二〇年にかけて世界的に蔓延し、世界中で二千万から四千五百万人もの人が亡くなったといわれている。日本の患者数は、『内務省衛生局「流行性感冒」』によれば感染者数二一一七万人、死亡者数三八万五千人を数え、死者四五万三一五二人という試算もある人類が被った最大のパンデミックである。「もしスペイン・インフルエンザがこの時に日本に襲来しなかったら、死亡せずに済んだ結核患者、肺炎・気管支炎等の呼吸器系の疾患者が数多存在し、それがインフルエンザによって命を絶たれる結果となった」と考え、これらの人々の死を、スペイン・インフルエンザによる死亡と見なす」（註21）という定義に従えば、流行性感冒と肺炎の症状を呈した関根もまた、スペイン・インフルエンザ（スペイン風邪）による死と見なすべきであろう。

病のロマン化

「肋膜になってからも肺病は天才病だといって大いに気焔を吐いたり、人は片一方の肋膜でへこたれているが、僕などは両方だからこの通り、ピンピンだと威張っていたものだ」（註22）。

この友人たちの証言からは、関根が肺病にある種の憧れを抱いていたことを伺わせる。これは「若く美しい者が蒼白く死ぬといったものから、才能ある者が夭折するといったものまで一種独特の甘美なイメージ」であり、肺病のロマン化と呼ばれる（註23）。こうしたロマンティックな肺病のイメージの成立、攪拌の過程で重要な役割を果たしたのが、樋口一葉（一八七二～九六）の生涯である。一葉の死を報じた新聞や雑誌の記事には、彼女が天才であることとその死因が肺病であることが記された（註24）。

関根は一九一七年に山形の村岡黒影の実家に旅した。そこで描いた《天平美人》（大阪中之島美術館蔵　図13）の画中に、関根は樋口一葉の歌を書き込んでいる。

朝な朝な対ふ鏡の影にだにはづかしきまでにやつれぬるかな　一葉作

この歌は恋患いを歌ったものとされている。なぜ一葉の歌を書き入れたのか。一葉と関根の接点、そして関根が自作にこの歌を書き入れた意味は、まだ詳らかにしない（註25）。一葉は肺病を患い、若くして世を去った天才と見なされていた。関根が肺病を天才病としてある種の憧れを抱

いていたこと、関根の周囲には、肺病のため二四歳で死去した作家素木しづ（一八九五～一九一八）がいる。素木は生前から〈一葉以来の〉という評言を受けていた（註26）。同じように肺病で夭折した女性の作家であり、より神格化されていた樋口一葉への崇敬の念が、関根の心に生じたのかもしれない。

《信仰の悲しみ》

関根正二は、恋に焦がれていた。日記や書簡には、片想いを含めて彼の恋人たちの名前が記されている。《信仰の悲しみ》（大原美術館蔵　図14）を描いた頃には、田口真咲という女性に失恋している。

「端書を銚子からよこして以来、帰京しても誰にも逢はずに黙々として描き出したのが彼の『信仰の悲み』といふ大作であった」と、友人は語っている（註27）。

《信仰の悲しみ》について、関根は新聞や雑誌の取材に対して、「朝夕孤独の淋さに何物かに祀る心地になる時　あした女が三人又五人私の目の前に現れる」などと、自分が見た幻影を描いたということを言っている（註28）。

また関根の父親も、新聞の取材に、

「暫く床に就てゐる中夢の如く眼に浮んだと云ふのが今度入賞した『信仰の悲しみ』と云ふのださうです、私は屋根職人で何も解りませんが寝てながらこれだ〳〵急に下図を描き出したので又気がおかしくなつたのかと心配しました」（註29）と答えている。

病床で描いたかもしれない一枚の下絵が、遺されている（図15）。あたかも自分の頭に浮かんだ原イメージを、忘れないために急いで紙に書き留めたという態の下絵だが、パステルで着色されているため、当初の関根の構想が伺える。三番目の女性の頭には、花嫁が被る白いベールのようなものが描かれている。

この絵について、関根自身も取材に答えて幻影のことを語り、また友人たちも関根が語ったさまざまな幻影を伝えている。その中では、久米正雄が伝える以下の証言が、この下絵の説明として頷けるものがある。

「帝劇の前で非常に美しい女に出会って一緒に日比谷公園を歩いて居る間に両人は何時の間にか新婚式を挙げて居るやうに思はれ、其の嫁入の行列が美々しく自分の眼の前を練って歩くやうに見えた事もあつたさうだ」（註30）。

久米は《信仰の悲しみ》という画題についても証言を遺している。

「有名になった『信仰の悲み』は最初『楽しき国土』といふ題で、関根君自身の考へでは、木の果など捧げてゆく女によって豊かな楽しい国土を現したつもりだったところ、伊東深水君か誰かが、楽しいところは少しも出てゐないといったので、『信仰の悲み』と変更したものださうである」（註31）。

《信仰の悲しみ》では、五人の女性のうち、中央の朱色の着物を身にまとった女性のみ黄色の果実らしき丸いものを二つ手に持ち、他の四人の白衣の女性たちは、いずれも葉を伴った赤い花を持っている。

この作品で、女たちが歩む大地には金色の絵具が塗られている。二科展出品当時の批評でも、評論家森口多里は「金箔の地面」と記している（註32）。金色の大地に当初の《楽しき国土》という画題から推測すれば、関根の意図は豊かな楽しい場面を描こうとしたとみてよいだろう。一連の証言によって、《信仰の悲しみ》は比較的短期間に描かれ、本人とし

ては未完の状態で二科展に出品されたと考えられる（註33）。

女性像

関根は新聞の取材に対して、《信仰の悲しみ》で表そうとした原像がまだ完全には表現できていない、と答えている。未完の理由を身体の調子が悪かったためとも言っているし、また別の記事では「絵具が充分に買へなかつたので、五十大の画面の端などは塗り残してゐる」（註34）と、画材不足もあった。

表現しきれなかった原像を追求した作品、言い換えれば《信仰の悲しみ》の続編と思われる女性像が《神の祈り》（福島県立美術館蔵　図16）とみられる。こちらは《信仰の悲しみ》と同じような風景の中を、やはり長衣を身にまとった女性が二人描かれている。前を行く女性は地面または花を指さし、赤い果実を手にささげた後ろの女性の頭部には円光が描かれている。何らかの意味で聖性をもっていることを表しているのであろう。それが宗教的な聖人なのか、別世界つまり死後の世界の住人なのか、あるいは関根にとって特別な存在という意味なのか、簡単には判断できない。

この作品が《信仰の悲しみ》の習作ではなく続編と考えられるのは、本人や父親の証言から《信仰の悲しみ》は構想から制作までの時間が短く、身体の不調や絵具不足などがあったと推測されるのに対して、この作品は塗り残しなどがなく、むしろ関根としては厚塗り（ただしカンヴァスは新しいものではなく、別の作品の流用）なことで、短期間の制作とはみえないからである（註35）。

《神の祈り》の後ろの女性とよく似たポーズの女性の下絵が、《信仰》と《祈り》（ともに福島県立美術館蔵　図17、図18）である。ただし、両図とも前の女性の替わりに二人の人物が正面向きに立ち、三人の人物像となっている。

三人像

関根が構想したもう一つのタイプの三人像に、中央に女性が立ち、その両脇に子どもが一人ずついるモティーフがある。パステルの《女と子供》や、『遺作展覧會目録』に図版が掲載されている《無題》（図19）などである。

なかでも《裸婦群像》（長野県信濃美術館蔵　図20）という素描には、関根の世界観が示されており、興味深い。画面は上下に区切られている。下段では、草原に三人の人物が立っている。中央の大きな女性は右を向き、その左右に子どもが一人ずつ正面を向いている。二人は口を大きく開け、歌っているようにも見える。そして左側の子どもは頭に包帯を巻いているように見える。上段では、やはり三人の人物が描かれている。中央の女性は両手を広げ、両足をX字形に交叉している。左側の人物は、左を向いて片手を頭の上に延ばしている。右側の人物は、横向きになって屈伸運動のようなポーズをとる。三人のポーズは、踊りを表現しているように見える。そして三人の頭の周りには、光輪のような円が描かれている。下段と上段は地上界と天上界、あるいはこの世とあの世で、あの世の住人たちが楽しく踊っている情景と解釈できる（註36）。

前記の《無題》や《女と子供》、あるいは、《三人（野原）》（三重県立美術館蔵　図21）は、《裸婦群像》上段の天上界のヴァリエーションであろう。スケッチブックの中にも、中央の人物を研究した《脚を交叉し

た人》（三重県立美術館蔵）が見られる。また《三人の女と日輪》（おかざき世界子ども美術博物館蔵）や《走る女と表紙下絵》（三重県立美術館蔵　図22）に見られる〈走る女〉も、上段の三人の人物のポーズを研究しているものと見られる。

『獄中記』の影響

関根の作品世界には宗教、とくにキリスト教的な宗教的雰囲気が感じられる（註37）。彼の日記にも、〈神〉という語がしばしば記されている。しかし、彼が聖書を読んでいたとか教会に通ったという事実は、彼自身の記録からも友人たちの証言からも見つかっていない。

関根の日記には多くの書物の名が登場するが、なかでも彼が明白に影響を受けているのは、オスカー・ワイルドの『獄中記』である。ワイルドは、世紀末デカダンスの象徴的存在で、奇行や快楽主義的言動が知られる。『獄中記』の内容は、〈悲哀〉の美と、キリストが芸術家であることを主張する。悲哀こそ人生の真実であり、人間最高の情緒であるという。

関根の日記や書簡には『獄中記』からの引用が見られる。とりわけ、「世に悲哀に比ぶべき真理はない。否な時としては、悲哀のみ唯一の真理と思はれる事さへ有る。［中略］この世は悲哀から造られた物で小児一人生るも、星一つ出るにもそこに苦痛の伴ふ事を忘れてはなりません。」という一節を抜き書きし、また恋人への手紙にも書いている（註38）。

この関根が好んだ一節を絵画化したとも思えるのが《天使（断片）》（三重県立美術館蔵　図23）と呼ばれている作品である（註39）。この作品では、ほぼ正面を向いた女性が両手で青い小さな壺を持っている。その壺からは煙が立ち上り、その先に子どもの上半身が描かれている。この女性には明白に円光が描かれていることから、聖なるものということになる。女性の両脇には、子どもが左右に一人ずつ描かれている。三人の立像に加えて、もう一人の子どもが宙に浮かんでいるという構図である。子どもがこの世に生まれる瞬間を表現していると考えられる。

壺が描かれた作品には《女の立像》（長野県信濃美術館蔵　図24）があるが、こちらでは壺は女性の足元に置かれ、女性の手は腹の前にあるものの、何も持っていない。画面に壺が描かれた女性像としては、《天平美人》が最も早い例と考えられる。この壺は、どこから来たのか。関根が壺を描いた意味は、まだわかっていない（註40）。

〈家族〉

関根正二には、二人の姉がいた。五つ上の長姉クラと、二つ違いのフサである。《姉弟》制作当時、クラは千葉県銚子に、フサは東京向島に住んでいた。彼は九人兄弟姉妹の四番目だった。上には兄弥助と姉クラとフサの二人。下にはキク、コト、繁の三人の妹と、秀男、武男の二人の弟があった。

関根の日記には、友人、恋人などとの交友だけではなく、家族のこともしばしば登場する。その一部を抜粋してみよう（註41）。

「今日はなき妹の七年忌にあたるので、家の者、親籍（戚）集る。」

一九一七年七月一日

「兄の仕事を手つだう。」同年七月二日

「午後から母がすぐの姉（フサ）の家へ、遊びに行く。俺れの、るす番だ。［中略］弟の秀男が外出して二時余りになるが帰らぬので心

配だから外へさがしに行く。弟暫くで帰る。」同年七月一一日
「銚子へ早く行きたい。姉（クラ）が早くくれば好いがな、一緒に行くのだ。元徳様の縁日だ。」同年七月二二日
「夜、長野へ行くので文房堂で絵具を求め帰り、姉の処で金二円を貰ふ。小使（遣）と云つて。」同年八月四日
「弟武男をつれて、上野山の所へ行く。十二時迄遊ぶ。伊東に遭つて帰る。」同年九月三日
「早やく金を取って親、伯父等に安心をさせたい。」同年九月一六日
「午前二時と云（ふ）と電気消へ水出る。二三十分間に二尺を出る。風益（々）強し、人間の悲鳴聞ゆ。材木流る。一時間（の）中に五尺に益す。子供、秀男、悲（避）なんす。暫くで母出る、俺母をせをふ、父床をあげる」同年一〇月一日
「今日はちちのかわりに車を引いて六ツ目迄で行き、疲れて帰る。」一九一八年日付なし
「父が足を悪くしたので不安でならない。好くなつてくれゝばよいが。」同年日付なし
「今夜は兄の家で酒を飲み、頭が離れて居る。兄は兄たるべし。俺れに語た。俺れも心から吾が兄弟たるを感ずる。涙を流さざるを得ない。」同年日付なし

日記から窺えるように、関根家は家族間の交流が密接であり、関根は家族思いであった。このことは、彼の作品のモデルにも、またテーマを推測する上でも重視すべき点と思われる。

ここで、人物のモデルについて考えてみよう。

関根の末弟武男の証言によれば、《信仰の悲しみ》の中央の三人の女性の顔は、関根の妹キク、姉フサとクラであるという。《姉弟》は、近所の子どもを描いたものという関根の父親の証言がある。《子供》は、近所の子どもを描いたとも、関根の弟武男がモデルとも言われている（註42）。《三星》の左側の女性については、関根の長姉クラという関根武男説と、関根の恋人という友人池谷与一郎説が伝わる。

一方、関根自身はモデルに関して何も語っていない。

前述のように子どもを描いた作品は複数あり、子どもたちの顔立ちも異なっている。また、顔や手のスケッチがあることから、姉妹や弟、近所の子どもたちをモデルに細部やポーズなどをスケッチしているものの、全体の構図や表情等は関根の頭にあるものを表現したため、関根としてはモデルを基に描いたという認識はなかったと考えられる。

〈子ども像〉

関根の小学校時代からの友人太田鷭三郎は、関根の最後の作品について、次のように証言している。

「最後の作は二十五号の自画像と二科への出品の五十号《慰められつゝ悩む》と十二号の赤い着物を着た小児とです。小児のは実に短時間に成された物で家人が外出して私と留守居してゐる間に近所の小児を呼んで画いたものです」（註43）。

二十五号の《自画像》と《慰められつゝ悩む》は現在行方不明、十二号の赤い着物を着た小児は石橋財団アーティゾン美術館蔵の《子供》（図25、口絵3頁）であろう。

前記の証言からは、関根がたまたま子どもの像を描いたような印象も受けるが、実際にはそうではない。というのは、関根は他にも《小供》（図

26）や二人の女性像の上に少年の顔を描いた《三人の顔》（ポーラ美術館蔵　図27）など、顔立ちが異なる子どもを何人も描いているからである。このことは、関根が〈子ども〉のモティーフに関心を持っていたことを示している。さらに、X線調査の結果、この《子供》は別の作品を切り取り、絵具を塗った上に描かれていることが判っている（註44）。関根は画材も十分には買えなかったから、使える画布が使い古しのものしかなかったのかもしれない。そうであったとしても、この頃の関根にとって、子どもは非常に重要なモティーフであった。

子どもを描いた素描も多い。中でも《手を合わせる少年》（図28）と《少年座像》（図29）と仮題のついている素描では、腹の前で組んだ両手の組み方に関心を向けている（註45）。顔立ちから、この二点は別のモデルのようであり、関根は何度も正面向きの子どもの像を描いている。『遺作展覧會目録』には、《小供》という題の作品が七点出品されている。いずれも一九一八年または一九年の制作である。子どもの姿は、絶筆となった《慰められつゝ悩む》にも登場している。

繰り返し描かれた子どもは、弟や近所の子どもの肖像に留まっていない。関根は子ども、それも少年像に何かを託している。現在の姿を描いた自画像に対応した、純粋無垢な存在として理想化された幼い頃の自分自身の肖像的な意味があるのではないだろうか。

慰められつつ悩むのは誰か

《慰められつゝ悩む》（図30、口絵3頁）は、絶筆となった作品である。

「死の境地が見へ出してから急いで描いた、それも最後まで筆の届かぬうちに死なねばならなかつた」（註46）。

画面には四人の人物が描かれている。そのうち、右から二人目の人物が左手に一個の黄色い丸いものを握り、右手も何かを掌に載せているような姿勢をとっている。この人物には円光が描かれている。また、左端の子どもが左手で赤い丸いものを一個持っている。関根のスケッチブックの中には、《合掌する男》（図31）や《顔》（図32）など、この作品に関連すると思われるスケッチがある。

モデルに関しては、関根の次姉フサが「私と姉と女の弟子の三人がモデルで、横向きに立って、他の余分なものはなにもありません。小さな子どもが脇におりますが、その子もいませんでしたし、向きもちがっております」（註47）と述べている。また、関根の母親の証言も記録されている。

「涙ながらに母君は語られました。

あの絵［二科展に出品すべき］の花は体がすつかり、いけなくなつてから、いつの間にか描き併へました。あの絵は御覧の通り署名することが出来ませんでした。病床には、いつも自分の画を置いて、見詰めておりました」（註48）。

「死は自身にもよくわかつたのだろう、絵の整理をして大部分は焼ひてしまうし、死んでから通知する知人の住所書きを集めて一包みにしたりした」（註49）。

関根自身も死期を自覚したのだろう。『遺作展覧會目録』には、《死（慰められつゝ悩むの続き）》という題名のパステル画が目録に載っている（図33）。題名のみで図版もないため確かめようもないが、関根の構想では《慰められつつ悩む》に続く物語があり、それは《死》という題であった。家族に見守られ慰められつつ、死への旅に向かわなければならな

かったのは、関根自身であった。だが、彼の物語は死で終わるのではないだろう。続く場面があったはずだ。それは、『遺作展覧會目録』の表紙になった《無題》（図19）にみられる女神と子ども像か、《裸婦群像》（図20）の上段のような楽園の情景かもしれない。

（いとう　きょう／専門員）

註

(1)『関根正二とその時代展』三重県立美術館　一九八六年九月六日～一〇月五日　福島県立美術館／一〇月一〇日～一一月九日
『生誕一〇〇年　関根正二展』神奈川県立近代美術館　一九九九年七月一〇日～八月二二日／福島県立美術館　九月四日～一〇月一七日　愛知県美術館　一〇月二九日～一二月一二日
『gallery F コレクション再発見　ミッシングリンク　関根正二の新発見と未発見』福島県立美術館　二〇一七年一月二一日～二月一二日
『生誕一二〇年没後一〇〇年関根正二展』福島県立美術館　二〇一九年九月一四日～一一月一〇日／三重県立美術館　一一月二三日～二〇二〇年一月一九日／神奈川県立近代美術館鎌倉別館　二月一日～三月二二日
なお、各展覧会の図録を、本稿では以下『一九八六年図録』『一九九九年図録』『二〇一七年図録』『二〇一九年図録』と記す。

(2)酒井忠康編『関根正二遺稿・追想』中央公論美術出版　一九八五年所収。本稿では以下『遺稿・追想』と記す。

(3)『遺稿・追想』一〇二頁

(4)伊東深水の証言は、「天分豊かなる関根君の芸術」『みづゑ』第一七八号　一九一九年一二月『遺稿・追想』一七一頁
『圓光』の舞台背景画は見つかっていない。この下絵の可能性がある作品が《女の顔》（神奈川県立近代美術館蔵　図34）である。ほぼ正面をむいた女性の胸像で、特徴は円光が描かれていることである。この円光はこの後の関根作品にしばしば登場する。
また、久米正雄は、
「あの人が本当に天才を発揮したと思はれたのは恰度去年の春鼻の療治をしてからの事で、その時描いた一二枚のもの（去年二科へ出品した「姉弟」といふのも其の中の一枚であるが）からで、今迄の関根君とは非常に変って居るのに驚かされた。［中略］実際あの時からの氏の画には天才の閃きが見えたかの如く感ぜられた位であった」
と語っている。久米正雄「関根正二君を憶ふ」読売新聞一九一九年六月一九日『遺稿・追想』一五七頁

(5)この書簡の本文は、
「暫くお逢いしませんでしたね、僕も変たが君も変た事と思ふ　僕が鼻を手術してからの出来事は上野山から聞いた事と思ふ　種々の事があつた　女の事があつた　總て僕の餘りに軽率な為め失敗した　僕の現在はそんな事にかまつて居られない　製作も多く出来る　どうしても描かねば居られぬ　頭は実に好い　黒と白の差がある　そして眞んとうに考へられる　［略］　自分は現在の日本の洋画界日本画彫塑の總を目覚さす　それがけつして自惚でない　自分は今油繪と彫塑をやつて居る　直接石にあたつ［て］居る　油は今迄で見へなかつた色が実に多く目に入る　不思義だ　東洋の文藝復興期［ルビでルネサンス］が来た　今、暫くにして行はゝる」
と書かれ、関根は心身の調子がよく意気軒昂であることが伺える。

(6)「其頃の絵は当時二三点僕の家に置いてあつたが、非常に凄いものだつた。夕方など薄れてゆく光で見てゐると魔気人に迫るものがあつた。それからのち、それらの絵を二科へ出すのだと云つて手を入れたが、それはもう昔日の凄気を失つてゐた。『姉弟』の原画などは実に凄いものであつた。」久米正雄「陋巷に輝く芸術〈関根正二君の死〉」『中央美術』五―七　一九一九年七月『遺稿・追想』二一二頁
「『姉弟』の方は、余り突つき過ぎて、始め出てゐた表現をずつと弱いものにしてしまつた。」三潴末松「関根君と霊感其他」『遺稿・追想』二一二頁

(7)「本年四月鼻の蓄膿を手術して以来、急に今迄見えなかつた色彩が見える様になり、次いで激しい神経衰弱に罹って、一度は日比谷公園で倒れ発狂した様に伝へられた程でした、今年出品した内『信仰の悲み』はあの様な幻影を

見て描いたもの、『姉妹』の方は自分の主観を現さうとしてモデル無しに描いたもの、今後も今の傾向でグングン進む積リです」　読売新聞一九一八年九月一六日『遺稿・追想』一四四頁

(8)『二〇一九年図録』一一五頁

(9)岡部幹彦「悲哀の聖地へ―関根の女性像モティーフの誕生とその展開―」（『一九八六年図録』）

(10)『現代の洋畫』第一七号（一九一三年八月一日発行）にゴッホの《自画像耳を繃帯せる》の図版が掲載されており、関根が眼にする可能性はあった。

(11)《三星》という題名の意味については、これまでオリオン座の中心をなす三つの星であり、福島地方では「三だいしさま」とか「三でいじさま」と呼び、三大師という宗教的意味を与えられているという説が唱えられている。しかし、白河で育った石井重衛は、白河周辺での三大星については聞いたことがないという。石井重衛『青春を駆け抜けた男　夭折の画家関根正二評伝』三二七頁。筆者も、福島県内の民俗学の研究者や福島県立博物館の民俗担当学芸員に聞いてみたが、やはり「三だいしさま」の信仰は聞いたことがないという返事で、この説を裏づける根拠は見つかっていない。

(12)『遺稿・追想』一四〇頁

(13)『二〇一九年図録』XⅣ頁

(14)『二〇一九年図録』XⅣ頁

(15)『二〇一九年図録』XⅤ頁

(16)『遺稿・追想』二三七頁

(17)『二〇一九年図録』XⅥ頁

(18)『二〇一九年図録』XⅥ頁

(19)『遺稿・追想』一五九頁

(20)加藤稔「関根正二と幻視」『精神医学』一七巻七号　一九七五年七月　七二頁

(21)速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ―人類とウィルスの第一次世界戦争―』二〇〇六年　藤原書店　二三八頁

(22)『審美』七―一〇　一九一八年一〇月『遺稿・追想』一四七頁

(23)福田眞人『結核の文化史』　名古屋大学出版会　一九九五年　一一四頁

(24)福田眞人　前掲書

(25)村田真宏「関根正二作『天平美人』屏風について」『福島県立美術館研究紀要』第3号　一九八八年

(26)山田昭夫「素木しづ白描」『素木しづ作品集』　北書房　一九七〇年　二一六頁

(27)三潴末松「関根君と霊感其他」『遺稿・追想』二一二頁

(28)関根が《信仰の悲しみ》に関して新聞や雑誌に答えた回答は、以下のようなものがある。

「私は先日来極度の神経衰弱になりそれは狂人とまで云はれる様な物でした　併し私はけつして狂人でないのです　真実色々な暗示また幻影が目前に現れるのです　朝夕孤独の淋さに何物かに祀る心地になる時　あした女が三人又五人私の目の前に現れるのです　それが今尚ほ目前に現はれるのです　あれは未だ完全に表現出来ないのです　身の都合で中ばで中止したのです」『みづゑ』第一六四号　一九一八年一〇月『遺稿・追想』一三九頁

「『信仰の悲しみ』と云ふのは、私が蓄膿症で一時極度の神経衰弱に罹った時に見た幻影描いた物で、今迄の作とは趣きを異にして居ますが、是を第一歩として将来斯した傾向に進んで行き度いと自分では思つて居ります」　時事新報一九一八年九月一六日付『遺稿・追想』一四二頁

(29)報知新聞一九一八年九月一六日『遺稿・追想』一四一頁

(30)読売新聞一九一九年六月一九日『遺稿・追想』一五九頁

(31)久米正雄「陋巷に輝く芸術〈関根正二君の死〉」『中央美術』五―七　一九一九年七月『遺稿・追想』一六三頁

(32)森口多里「二科会の画」都新聞一九一八年九月一三日『遺稿・追想』一五一頁

(33)　最近の研究で、この金色の顔料が真鍮であることが明らかになった。塚本貴之、東京理科大学中井研究室、木下浩司「関根正二《信仰の悲しみ》の光学調査―金色顔料と下層絵の存在―」『二〇一九年図録』六八頁

この幻影について医学的に考察した加藤稔「関根正二と幻視」によれば、「鼻の手術が誘因となることがあっても、単にそれによって精神病を来たした例を、耳鼻科医もわれわれも経験したことがない。［略］この手術から発病までの期間、症状、経過からすると、術後合併症とは考えられない。［略］また心因反応とは考えられない。［略］また梅毒性のものという説もあるが、

症状や経過から考えて、これはもう問題とするにあたらない。［略］慢性酒精中毒も否定される。［略］結局、心身にわたる種々の負荷が重なり、それがひきがねとなって発症に至った内因性精神病と考えられる。［略］分裂病特有の症状は何も確かめられないこと。幻覚にしても、それが幻聴ではなくて幻視に限られており、しかもかなり鮮やかなものであること。経過が急性で、後に少なくとも目だった欠陥状態を残していない。このことから分裂病とは思えない。［略］次に躁病であるが、幻視を来したことからこれも考えにくい。［略］種々の角度から考えて、結局内因性非定型型精神病、ことにLeonhardの不安・至福精神病の恍惚性霊感精神病と思われる。［略］夢幻様状態やもうろう状態とするのは不適当であり、同時に夢幻様精神病やてんかんとするにも無理がある。［略］関根正二は大正七年五月から、少なくとも九月まで精神病であった。一ヶ月余り、気分の昂揚、宗教的恍惚、異常行動が目だち、ついで不安、銷沈、幻視が数ヶ月続いた。

代表作〈信仰の悲み〉は病気の幻像をモティーフとしている。その幻像の源は関根個人の幼児体験から、さらに神話的、アニマ的原型にまでさかのぼることができる。関根の特異な創造は、不安・至福精神病を通じてもたらされたものである。」と結論づけている。

加藤稔「関根正二と幻視」『精神医学』一七巻七号　一九七五年七月　七六頁

(34)『審美』七―一〇　一九一八年一〇月『遺稿・追想』一四七頁

(35)なお《神の祈り》という題名が最初に確認できるのは、一九六〇年に開催された『関根正二　村山槐多二人展』であり、関根本人の命名ではない可能性が高い。「神の祈り　作品解説」及び「関根正二歿後の展覧会出品リスト一覧」『一九九九年図録』参照。

(36)この素描の重要性は村田真宏前掲論文で指摘されている。

(37)関根の友人たちの中で、作品の題名に言及しているのは久米正雄である。「一体君は学校なんかへ余り行かなかつたに拘らず『信仰の悲み』とか『慰められつゝ悩む』とか、少し生意義なやうなところもあるが、いゝ題をつけた」「陋巷に輝く芸術〈関根正二君の死〉」『中央美術』五―七　一九一九年七月『遺稿・追想』一六三頁

(38)一九一五年一一月二七日の日記。一九一七年五月頃の恋人あての手紙。いずれも『遺稿・追想』。なお、関根が見た訳書は、本間久雄訳『獄中記』　新潮社　一九一二年と推測される。

(39)この作品の現状、題名の由来等については、『二〇一九年図録』八〇頁に詳述がある。

(40)壺を持った女の図像は、木村荘八の《壺を持つ女》（愛知県美術館蔵）が知られる。一九一五年に描かれたこの作品は、第三回草土社展（一九一六年一一月一一日～一一月一七日　赤坂溜池三會堂）に出品されている。関根が同展を見たという記録はないものの、その可能性はある。

(41)これらの日記の引用は、いずれも『遺稿・追想』から。

(42)太田靄三郎「思ひ出ずるまゝに」『遺稿・追想』二二五頁。一方、関根の末弟武男氏は自分がこの絵のモデルと話したことを、土方定一が紹介している。「関根正二、遺聞」『土方定一著作集　近代日本の画家論Ⅱ』一九七六年一一月　平凡社　一八一頁。なお、《子供》のモデルについては、酒井忠康は「わたしは氏の面立ちをうかがっていて、もしかしたら、あのブリジストン美術館の『子供』（大正八年）の絵のモデルではないか、と思った。いまでは絵葉書で想像するほかない『慰められつゝ悩む』の、画面左側の少年も、どことなく井上さんに似ているような気がしたが、この点については、何事もおっしゃらなかった。」（『遺稿・追想』二六四頁　新装普及版「あとがき」）と記している。文中「井上さん」とは、関根正二と親交があった井上正恕である。関根の日記には、「井上」正恕君が水泳場へ入つたと嬉ぶ。［中略］三時頃、正恕、たか子を連れて泳ぎに行く。初めての泳ぎだ。水が汚いので不快でもあった。」（一九一七年六月三〇日付）などの記述がある。筆者も面会した際に、同様の印象を受けた。調査した一九八六年当時同氏は齢八〇に近かったが、その顔立ちが《子供》像を彷彿させるのに驚き、調査に同行した二人と顔を見合わせた記憶がある。ただし、井上家は一九一七年一〇月一日の暴風による水害を機に多摩に移住したため、以後は「近所の子供」ではなくなっている。

(43)太田靄三郎「思出ずるがまゝに」『遺稿・追想』二二五頁

(44)《子供》（図25）と《三人の顔》（図27）が、もとは一枚のカンヴァスを切断し、以前の絵を塗りつぶして描いたことなどについては、原舞子「中断された絵画―関根正二作品の図像をめぐって―」『二〇一九年図録』一四五頁に簡潔

にまとめられている。

(45) この二点の素描は、いずれも久米正雄旧蔵である。関根の日記中に「自分は急に悲しくなつた。それは、素描の気に入たのを七枚、自分の病気の時、三星氏に取られた事だ。それが、自分が、あづけて居たのを、預からないと云ふにある。何と悲しい事であらふ。」（一九一八年一二月一八日『遺稿・追想』一〇五頁）とある。文中の三星氏は、久米正雄の俳号である三汀のことと考えられる。現在遺っている関根の日記は、本人の自筆ではなく、複数の手になる筆写であり、筆写の際の誤記と推察される。なお、関根の日記出版の事情については、『遺稿・追想』の編者酒井忠康「あとがき」に詳しい。

(46) 村岡黒影「関根正二君を憶ふ」『みづゑ』第一七八号　一九一九年一二月『遺稿・追想』一八五頁

(47) 関根フサの証言は、酒井忠康「関根正二異聞」『青春の画像』　美術公論社一九八二年　一九九頁

(48) 赤司尚道「関根正二兄の死を悼む」『信仰の悲み　関根正二遺作展覧會』『遺稿・追想』二二二頁

(49) 佐々木猛「関根君」『信仰の悲み　関根正二遺作展覧會』『遺稿・追想』二二一〇頁

図３《少年》
個人蔵

図２《子守する女と横顔》
個人蔵

図１　村岡黒影宛書簡　1918年５月20日
福島県立美術館蔵

図７《病める者》
『文章世界』13巻11号

図５　村岡黒影宛葉書
1918年７月３日
福島県立美術館蔵

図６《女》
『文章世界』13巻６号

図４《姉弟》
福島県立美術館蔵

図８《三星》
東京国立近代美術館蔵

図12　《スケッチブック　包帯の男》
三重県立美術館蔵

図９　ゴッホ
《自画像　耳を繃帯せる》
『現代の洋畫』17号　白黒図版

図13《天平美人》
大阪中之島美術館蔵

図10《無題》
『文章世界』14巻 3 号表紙

図11《文章世界表紙下絵》
三重県立美術館蔵

図15《信仰の悲しみ》下絵

図14《信仰の悲しみ》
大原美術館蔵

図18《祈り》
福島県立美術館蔵

図17《信仰》
福島県立美術館蔵

図16《神の祈り》
福島県立美術館蔵

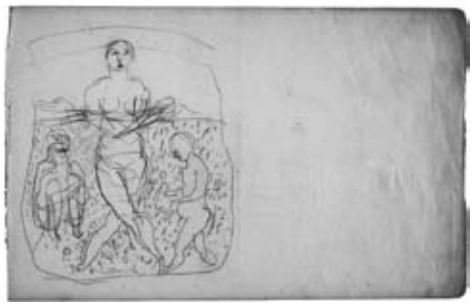

図21《三人（野原）》
三重県立美術館蔵

図20《裸婦群像》
長野県信濃美術館蔵

図19《無題》

図24《女の立像》
長野県信濃美術館蔵

図23《天使（断片）》
三重県立美術館蔵

図22《走る女と表紙下絵》
三重県立美術館蔵

図26《小供》
個人蔵

図25《子供》
石橋財団アーティゾン美術館蔵

図29《少年座像》
個人蔵

図28《手を合わせる少年》
個人蔵

図27《三人の顔》
ポーラ美術館蔵

図32《スケッチブック　顔》
三重県立美術館蔵

図31《スケッチブック　合掌する男》
三重県立美術館蔵

図30《慰められつゝ悩む》
（絵はがき）

図34《女の顔》
神奈川県立近代美術館蔵

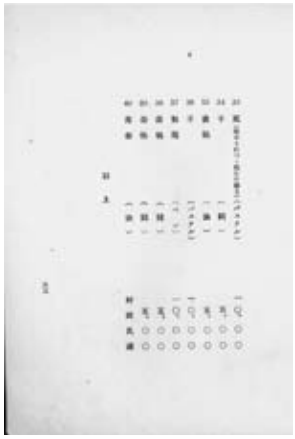

図33『信仰の悲み　関根正二遺作展目録』　右 表紙　左 出品目録

関根正二　最後の一年

伊藤　　匡（専門員）

大正時代の洋画家関根正二（1899-1919）は、スペン風邪（スペイン・インフルエンザ）に罹り、肺結核を発症し、わずか20歳でこの世を去った。1918年４月頃に蓄膿症の手術をした後、関根の作品は画風とモティーフを大きく変換する。色彩的になり、人物画が多くなる。これ以降、19年６月に亡くなるまでの約一年間に、関根は《信仰の悲しみ》《姉弟》《三星》《子供》《慰められつゝ悩む》などの代表作を描いた。

本論考では、「子守する少女」、「病める者」、「家族」、「子ども」などをキーワードとして、作品の断片、素描、画稿、書簡や日記などを材料に、関根が最後の一年間に描いた作品群について考察する。

Sekine Shoji: His Final Year

Ito Kyo (Curator, Fukushima Prefectural Museum of Art)

Sekine Shoji (1899-1919) was a Japanese Western-style painter active during the Taisho era (1912-1926) who died at the age of 20 from pulmonary tuberculosis after contracting the Spanish flu. His work underwent a dramatic shift after he was operated on for empyema in April 1918, and from then until his death in June 1919, he produced mainly figure paintings in bright colors. This final year of his life saw the creation of many of his best-known works, including *Sorrow of Belief*, *Sister and Brother*, *Three Stars*, A *Child*, and *Solace and Worry*. Through an analysis of Sekine's drawings, sketches, letters, and diaries, this paper considers a group of his final works, focusing on themes such as illness, family, children, and childcare.